

Jean-Paul de Lagrave (éd.), *Madame Helvétius et la Société d'Auteuil. Avec concours de Marie-Thérèse Inguenaud et David Smith.*

Oxford, Voltaire Foundation, 1999, xviii+142 pp.

森村敏己(一橋大学)

エルヴェシウス夫人(1722-1800)のサロンは、夫の生前には百科全書派を中心とする著名なフィロゾーフたちが、またその死後、彼女が当時はパリ郊外だったオートゥイユに移り住んでのちはイデオログと呼ばれる人々が集った場として知られている。

18世紀のサロンといえば、タンサンやジョフラン、あるいはレスピナスといった女性たちの名前が思い浮かぶが、エルヴェシウス夫人のサロンはいわゆる啓蒙思想の全盛期からナポレオンのクーデタの時期まで存続したという点で特異な位置を占めている。啓蒙の世紀の主演となった思想家たちと、彼らの影響のもとで自らの知的形成を行い、革命という社会的変革に現実に参加した若い世代とを結びつける空間、そう考えれば、エルヴェシウス夫人のサロンは啓蒙研究にとっても、またイデオログを初めとする革命期の思想研究にとっても興味深いテーマであるに違いない。

本書は、序とエルヴェシウス夫人の簡潔な伝記、およびオートゥイユ時代のサロンの常連たちを対象とした諸章から成っている。取り上げられるのはアンドレ・モルレ、マルタン・ルフェーヴル・ドゥ・ラ・ロシュ、カバニス、ベンジャミン・フランクリン、ジャン・アントワーヌ・ルシェ、ヴォルネの六人。カバニスとヴォルネは著名なイデオログであり、モルレもその回想録が18世紀後半から革命期にかけての貴重な史料とされていることからその名は広く知られている。フランクリンについては言うまでもない。しかし、残る二人の知名度は明らかに低い。それでもまだルシェは、当時は名の知れた詩人だったし、革命期にはジャーナリストとしても活躍しているが、ラ・ロシュに関してはどうだろう。エルヴェシウス研究者以外に彼の名に出会う人がどれだけいるだろうか。

こうした知名度の違いは各章のテーマ設定にも影響しているように見える。エルヴェシウス夫人と彼女を取り巻くサロンの常連たちとの関わりに焦点を当てながら、六人の著述家の思想や活動を描く、という本論集の趣旨に添った記述となっていることはどの章にも共通しているが、カバニスとヴォルネについては、エルヴェシウスはもちろんサロンの主要なメンバーだったドルバックからの影響を確認した上で、イデオログ世代の独自の思想的展開を分析するという方法が採られている。こうしたテーマを設定したのは、この二人のイデオログの思想的重要性を考慮してのことだろう。カバニスが医学、生理学を基盤としながら、内的感覚あるいは内的印象という概念を用いることで、身体組織と知的・心理的活動との関係をより密接に理解しようと努め、エルヴェシウスの唯物論的感覚論を発展させたとする解釈や、またヴォルネがモラルの問題を一定の法則に従う自然科学として扱うという点でエルヴェシウスやドルバックを受け継ぎながらも、政治的平等や自由意志の主張において、「革命の哲学者」であったとする指摘は確かに興味深い。

一方、モルレとルシェは革命がサロンのメンバーの間にもたらした亀裂を象徴する人物として

描かれている。革命によりそれまで築き上げた地位と財産を失うことになるモルレは、民衆の直接行動を野蛮な下層民による暴動だとして嫌悪し、カバニスやラ・ロシュと決別、オートウイユを離れる。一方、立憲王政の支持者ルシェは共和派を批判する言論活動に身を投じ、恐怖政治の犠牲者となる。二人は革命前から保守的な人物としてサロンの中で孤立していたわけではない。専制と宗教的抑圧への嫌悪、言論・出版の自由、政治的改革主義の要求はすべてのメンバーに共通している。いわば「啓蒙の大義」への共鳴が彼らを結びつける絆だった。二人のサロンからの離脱はある意味では啓蒙思想の政治的プログラムの曖昧さを表しているのかも知れない。

フランクリンに関しては、主にエルヴェシウス夫人との親密さに焦点をあてた記述となっている。70歳を越えたフランクリンが60歳のエルヴェシウス夫人に結婚を申し込んだという有名な逸話は彼一流の冗談だったとしても、二人の友情が社交を越えた真摯なものであったことは確かなようだ。パリ条約締結後、病を得てアメリカに戻ったフランクリンが夫人にあてた手紙は、オートウイユで彼女と過ごした時間へのノスタルジックな回想に満ちている。

最後にラ・ロシュ。彼はエルヴェシウスの『人間論』の死後出版に尽力し、その後2度に渡ってエルヴェシウス全集の編者を務めたが、革命期の政治状況に合わせてエルヴェシウスの作品を改竄したことで悪名高い人物である。確かに彼の生涯は激動期を生きた一人の知識人の人生として興味深いものだが、詳細な史料調査に基づく叙述もラ・ロシュを魅力的な人物として描き出しているとは思えない。

18世紀から革命期にかけての思想的・政治的運動に、サロンという場が大きな役割を果たしたことは疑いない。しかし、サロンがその重要性の多くをそこで交わされた会話、つまり研究者にとっては資料的に確認することが困難な要素に負っていることも事実である。本書は回想録や書簡を用いることで、サロンの空気を再現しようとしているし、また、各章はそれぞれ面白く読める。しかし、それでもある種のもどかしさが残るのは、テーマの性質上やむをえないことなのだろう。